

激戦の島サイパン

昭和19年6月三万二千人の日本陸海軍の将兵が悪戦苦闘の末、『身ヲ以テ太平洋ノ防波堤タラン』の言葉をのこして全員玉砕。また、米軍に追い詰められた在留邦人のうち数百名の婦女子が捕まって恥をさらすよりはと、両手に子供を抱きかかえ、口々に『バンザイ！』と叫びながら、断崖絶壁へ身を投げた島——サイパン——太平洋戦争が終って27年。南太平洋激戦地の一つ、サイパン島へ民間慰霊団が訪れた。今もなお、当時の激戦の跡をとどめ、多くの英霊や民間人の死屍がジャングルの奥深く散乱しているという。慰霊団の一人、木暮雄治氏（51歳）は、戦中南方の島々を転戦、数多くの戦友を失ない、自らも瀕死の重傷を負った。再びこの地を訪れて、27年前を回顧する木暮氏の胸には、どのような思いが駆けめぐったであろうか。……

自主交渉の壁は厚く

—水俣病新認定患者—

東京丸の内チッソ本社前に座り込んでから1カ月以上過ぎた。その間に水俣でまた1人の患者が死んだ。52人にのぼる死者。積み積った耐えがたい憤怒は死んでも帰らない決意にかわる。*このまま帰れんばい。なんとしても切り開かねばならない東京での自主交渉の道。1月7日、チッソ五井工場の夏目労組議長に組合の姿勢を聞くため訪れた川本輝夫さん（40歳）等は、会見を断われ、暴力で排除された。

打撲傷を負った川本さんや外人カメラマン。なぜ、袋だたきにあわねばならないのか。市民集会で川本さんは、「チッソの人間を人間とも思われぬこのような暴力こそ、水俣病を生んだ……」

「きのうはチッソ五井工場で組合幹部からコジキのようなまねをしているといわれた。私達は東京コジキといわれてもよい」

水俣病で全く歩く事もできなくなった佐藤ヤエさんは、

「水俣病で歩く事ができなくなって残念で仕方がない。今、人並みに仕事をしたり、歩いてみたい」と訴える。チッソ本社に通じる四階の入り口で、これまで何十回となく話し合いの申し入れを行なった。その度に会社の責任者と会う事もなく防衛の社員ともみ合いをつづける。そこには、80億という会社の力と名もない貧しい者の出口のない憤りだけがうずまく。

力対力はエスカレートするばかり。ついに1月11日、会社は入口に鉄格子をつくった。話し合いの窓口はもっとせばめられた。チッソ久我取締役は、会社は中央公害審査会に調停を依頼し、自主交渉派とは今のままでは会えぬという。

*これまでの長い20年間にもわたる苦しみがお前等にわかるか、まず、誠意をもって我々に会え。我々の苦しみの代償はそれなんだ。

患者の語る言葉は虚しくチッソ本社に響きわたる。

自主交渉の壁、それは、80億という会社の力と言えないか。